

すっかんぽ

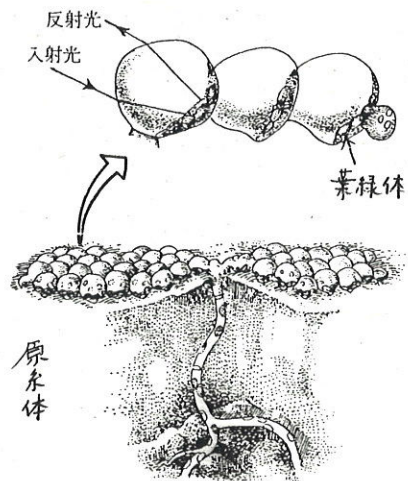
☆ 研究室だより No.17 1993年10月号

☆ ヒカリゴケ と

ヒカリモ ☆

9月20日 午前8時55分、カーラジオから 栃木県内のニュースが流れてきた。 「…… 矢板市下伊佐野では現在、ヒカリモが大繁殖しています。 …… 県立博物館の 高岡さんによると、県内では、極めて 珍らしく、11月下旬頃まで みられるでしょう……」 だいたい こんなことを 言っていた。 『ヒカリゴケ』なら聞いたことがあるが、『ヒカリモ』というのは、聞いたことがない。 たぶん、ヒカリゴケの まちがいでは、と思い、生物学大系(中山書店)で ヒカリゴケも 調べてみた。

『ヒカリゴケ： 光るゴケとして 有名である。 …… 生育地は、ちおとした 洞くつ とか 岩穴の なかであって、雨水などの流れ 込まない 柔らかい 土壌の上に 生育している。 …… 』



確かに“光る”植物であるが、ホタルなどのように 自ら光を放つ“発光”ではない。 体の一部の細胞が レンズ状 になっていて、入ってくる光を 反射するので 光っているようにみえるのだ。 だから、見る角度によっては 見えないし、全くの暗闇では、光らない。

ヒカリゴケにしても、まだ見たことはなかったので、場所を確認するために直接、博物館の 高岡さんに 電話で 聞いてみることにした。 「この前、ニュースで 放送されていた『ヒカリゴケ』について 教えていただきたいのですが、…」 「…ああ、『ヒカリモ』ね」

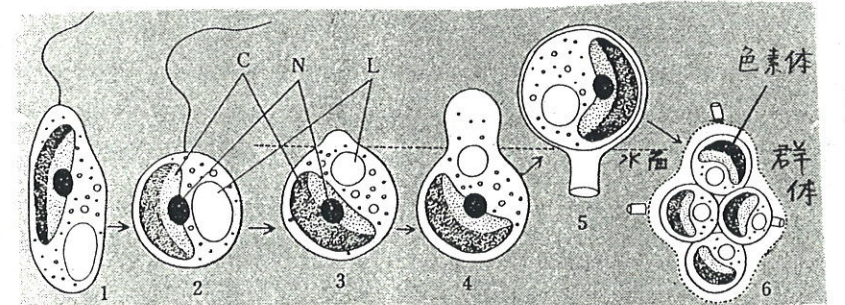
「え、ヒカリゴケの まちがいじゃないんですか？」 「いいえ、よくまちがえる人がいますが、^{おういくべんしゅう}黄色鞭毛藻目のヒカリモです。」

どうやら、大きな カン違いを していたようであつた。 ヒカリゴケとは別に『ヒカリモ』という 生き物が この世に 存在しているらしいが、

再び 生物学大系と 聞くことになった。 確かに、ヒカリモは、のっていた。

『ヒカリモは、小さな池や 水溜りから 見いだされる、ごく小さい(4~8μ)藻類で、かすかな光が はいてくる 洞くつでは、比較的大きな 椀状の 色素体で 光線が 屈折反射するために、藻自体が 発光しているようにみえる。

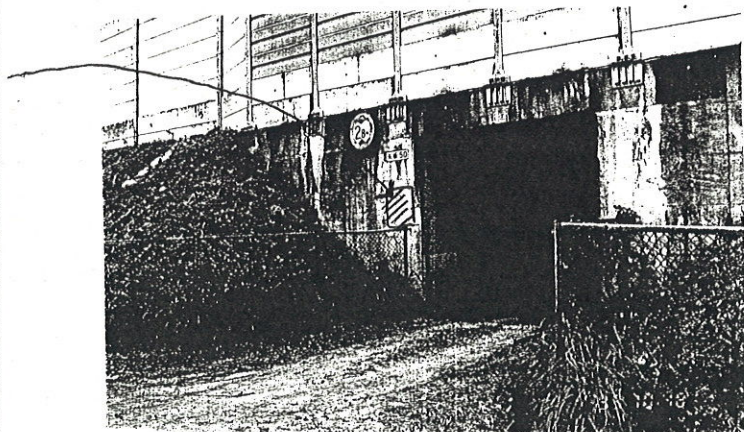
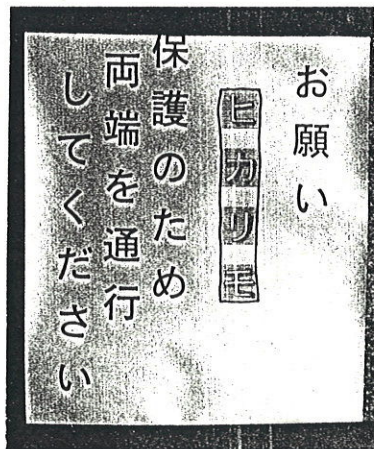
ヒカリモの生活史を示す図
1, 2. 遊走体, 3, 4. 鞭毛を失って空中に向かって突起がのびる, 5. 被囊体, 6. 群体。
C: 色素体 L: リューコシン球, N: 核(日比野信一, 1915)



…… 水面が 群体でおおわれると、あたかも 水面上に 黄褐色の粉を 散布したようになり、しかも、群体は 空中に 露出しているので 光が 水中に 吸収されることがなく反射されるため、金属光沢と 帯びているようにさえみえる。』 とあつた。 光るしくみ 自体は、ヒカリゴケとよく似ている。 どちらも細胞が レンズ状 になっていて、色素が 光を 反射するのである。 しかし、ヒカリモの“金属光沢”とは、いったいどんな 光なのであろうか。 私は、青木さん(小山市立豊田北小学校教諭)とさそい、矢板へと向かった。

高岡さんに教えてもらったとおりに 近くまではきたが、後は、地元の人に直接きいてみることにした。 ちょうど 農家の庭先で 人なつこうな オバちゃんが うまそうに バナナを 食べながら、こっちを見ていた。 オバちゃん は、もう、こういう話には、慣れこ、という感じで 手ぎわよく 場所を 教えてくれた。 ニュースを 聞いて、見に来た人が け、こういたらしい。 さらに、NHK に連絡をした人の 家まで 教えてくれた。

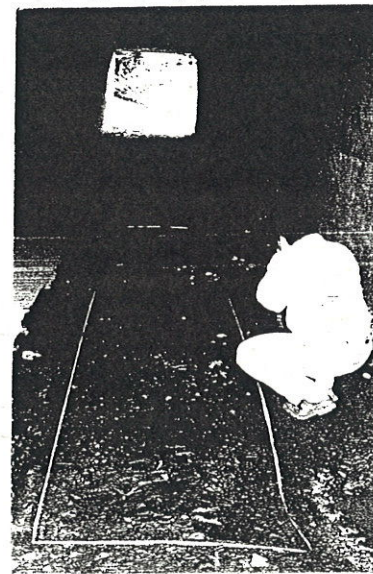
オバちゃんが 教えてくれた 所は、高速道路の下と通っている トンネル (農道の一部) であった。 しかし、はきりいて、ごくありふれた トンネルで、別に 水たまりが あるわけではない。 こんな所に、“金属光沢”の 光を 放つ ヒカリモがいるのだろうか。 トンネルの 入口には、ヒカリモ 保護のビラが はてある。 さらに トンネル 内部には、1.5m x 5m くらいの 範囲が、ビニールの ひもで 囲まれているのが みえた。 この 状況から 判断すると、 ひもの 範囲の中に ヒカリモが 生息している と、考える しか なさそうである。 光を 反射して 光る、ということなので、いろいろな 角度から ながめてみたが、どうも 金属光沢とは 程遠いのだ。 その時、しゃがんで みていた 青木さんが、声を上げた。



上は 高速道路。 どこにでも ありそうな トンネル

「右端の方から しゃがんでみると、光、てるよ。 ほら」 指さす方向をみると、何となく 黄色、ほく 見えない こともない。 「もしかして、これが そうなの？ これ で 光、ている といえるの？」 あまりに 弱々しい 光り方なので、青木さんと 私は 顔も 見合わせたが、光、ているとすれば、この 光 しかない。 よくみると、ひもの 内側にも 人の 足跡が たくさん ついている。 おそらく、ニュースを 聞いて 見に来た人々が 歩き回、ているうちに ふみつけて しま、たの だろう。 こんなことが 起、こ、ている かもしれない かと、想像は していたが、が、かりして しま、た。 そこで、バナナの オバちゃんが 教えてくれた 渡辺さんの 家へ 行、てみる ことにした。

渡辺さんは、5月頃、トンネルの中が 黄色、ほか、たので 最初は、どれか、が、農薬を こぼしたのかと、思、っていた そうだ。 しかし、9月に入ると、3倍 くらいの 範囲に 広がり、まるで 金色の ペンキを 流したように、あざやかに 光りだしたのだ。 たまたま、テレビで ヒカリゴケの 話題が 放送されていたので、これも、ヒカリゴケの 一種か、と、思、て NHK に 連絡 した、という いきさつらしい。 NHK に 同行 した 博物館の 高岡さんによると、『ヒカリモ』は、全国的にも



ひもの 内側が 光、っていた。

珍しく、県内で 確認されたのは、今回が 初めて なの だろう。 トンネルの 向こう側は、山で、しみでてきた 水が トンネル 内に 流れ込み、一年中、水の 絶えない、環境が、ヒカリモには、適、っていたの だろう。 同じような トンネルは、たくさん あ、たが、ヒカリモが 繁殖 していたのは、ここだけ しか なかった。 偶然の 産物か、も 知れないが、“金色の ペンキ”と 流したような 光は、はたして、来年も みる ことが できるの だろうか。